



# 体育における言葉の意味を問いなおす

酒井忠喜

体育は実技教科と言われます。確かに身体を動かすことを通して技能を獲得するという面をもっている教科です。一方、技能の獲得場面やプレイ場面で子どものつまずきにに応じて、教師から子どもへ言葉をかけたり、子どもどうしが互いに言葉をかけ合ったりして学習をする教科でもあります。そう考えてみると、体育においても言葉を媒介にして「できる」ことを追求し、また「わかる」という認識を深めているという点でよいでしょう。「言葉」という観点から実践を見つめなおしてみると、わたしたちのこれまでの実践においても、子どものつまずきを見取り、どのような言葉かけを教師がするのかを大切にしてきました。そこには、系統性研究に基づく確かな教師の見通しがあることもわかってきました。本稿の山内実践や大貫実践からもそのことはよくわかります。

また、教師がかける言葉よりも子どもが仲間どうしでかけ合う感覚的な言葉が運動のイメージや技術ポイントをつかみやいとといった面があります。こうした点に着目して、「魔法の言葉さがし」のように子ども

の感覚的な言葉さがしを通して技能分析や技能の習得をグループ学習で進めてきた実践も生まれています。

また、授業を振り返り、自分の授業を分析する有効な手段として子どもに感想を書かせたり、グループノートを書かせたりしてきました。一方、言葉だけでは体育の授業の全体像をとらえることに限度があります。それでも、運動を言葉にするということは、どういうことなのか、どういう意味をもつのかを今月号でじっくり考えてみたいと思います。

体育指導における言葉のもつ意味とは何なのかを論考で取り上げ、実践の広場では子どもの動きのどこを見て教師は言葉かけをするとよいのかについて考えます。また、運動の感覚を感想に書かせる意味を問う実践や子どもの感想文から教師は何をよみとることが可能なのかといった例を紹介していきます。

一緒に「言葉」という切り口から自分の体育実践を見つめ直してみませんか。

(さかい ただよし／編集部)